

災害から見出した『光』

Shining the Light of the Local Scene, Matsushima

引地 伸也* 大宮 司寛* 鹿野 護* 千葉 伸一*

Shinya HIKICHI Yutaka DAIGUJI Mamoru KANO Shinichi CHIBA

1. はじめに

「松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖を恥じず」(奥の細道より)

東日本大震災では、ここ松島町は震度6弱を記録した。さらにこの地震が引き起こした大津波は東北地方の太平洋沿岸部全域に甚大な被害をもたらしたが、松島一帯は遠浅の多島海という松島湾の地勢が津波の威力を抑え、周辺地域との比較の上では軽微と言える被害に留まった。ただし、あくまでも他地域の被害状況が激甚であるために言われているのであって、一件の災害として小さいわけではない。犠牲者を含む被災者、特産の牡蠣養殖棚とその処理施設・伊達家文化を背景とした史跡・松島観光の賑わいを支える観光施設・遊覧船などの破壊・流失・浸水、自然地形の崩壊などといった被害が、町内各地で発生した。

2. 【松島流灯会 海の盆】背景と現在

(1) 「未来への原点回帰」

このプロジェクトは、こうした状況の中で、住民が主体となって、自分たち自身の価値観を再考し、原点回帰させようという取り組みである。そして、様々な分野における模索の重なった、自立的なランドデザインであるとも考える。

1959年、花火大会が始まる。それは第一次高度経済成長期を象徴する華やかで大規模なものであった。夜空に描かれる大輪に人々は酔いしれ、夏の松島は花火を鑑賞する15万人もの人々によって、大変なにぎわい見せるようになった。しかし、その一方で、盆踊

りはその後、大幅に縮小しながら、ついに途絶えてしまうことになる。住民同士、そして住民と観光客が交流する祭りは、時代の変化とともに、住民不在の商業イベントに変貌していったのである。

その後、花火大会はバブル経済崩壊後も続けられた。しかし警備などの大きなコストが負担となり、運営は年々厳しいものとなっていく。

(2) 「本来の祭りをもう一度」

そんな中、東日本大震災が発生する。海岸近くの商店街、住宅、観光施設は大きな被害を受け、町の観光にとって甚大なダメージとなった。また町全体でも70センチの地盤沈下が観測され、各地で冠水する状況となった。

花火大会を中止する。中止しない。夏の一大イベントは二者択一の議論のテーブルの上に上げられることになる。しかし、余震が続く中、沿岸部の施設の被害を考慮すると、15万人という観客が安全に花火を鑑賞することは困難であった。

こんな時だからこそ、盛大に花火をあげよう。いや、無理に開催することは、お客さんに危険を強いることになる。花火大会の開催をめぐる、小さな町の中に、様々な意見が飛び交った。

住民の間から「途絶えた盆踊りを復活させるのはどうか?」という意見が出始めたのは、そうした状況の中であった。イエスカノーかという議論ではなく、この状況の中で我々は何をしていくべきなのか、もう一度考え直そうという流れである。この声に、多くの若者達が賛同した。観光関係者はもちろん、役場職員、僧侶、デザイナー、先生、薬剤師など

など。地元の様々な才能が集まったのである。それは地元への想いと、これまでのコミュニティのあり方への疑問が重なり、大きな力となっていた。

(3) 「寺町としての営み」

松島は日本三景という観光地として知られ、海に浮かぶ島々が作り出す美しい景観が取り上げられることが多い。しかし、瑞巖寺を中心とした寺町としての魅力はあまり知られていない。明治時代以前は、数多くの寺や庵が存在し、観光地でありながらも、霊場としての役割を果たしていたと考えられる。そうした歴史は町民にもあまり知られていないのが現状である。

松島の寺町文化を今でも感じさせてくれるのが、およそ700年ほど前から行われている瑞巖寺の「大施餓鬼会」(おせがきえ)という宗教行事である。

住民は、その行事にあわせて、盆の営みを行ってきた。その中でも盆踊りは、そのルーツである念仏踊りまでさかのぼると、江戸時代から続いてきたとされる。

(4) 【松島流灯会 海の盆】開催

【松島流灯会 海の盆】(*以下、【海の盆】と記す)は、ここに暮らす我々が自律的に、観光文化振興と、失いかけた生活文化を再構築する仕組みの双方を提案したなつかしく、新しい夏祭りである。この催事には以下5つのコンセプトを掲げ、具現化するために、細分まで設計し丁寧に実装した。

大切にしたいこと

- ①松島の伝統的なお盆の供養の場
- ②楽しい祭りで郷土愛を育む場
- ③子供たちが地域の人とふれあい学ぶ場

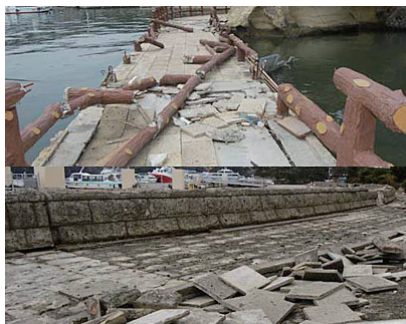


写真-1 東日本大震災、津波の被害



写真-2 公民館にて有志の打ち合わせ



写真-3 鎮魂の光 (灯籠流し)

*松島流灯会海の盆実行委員会

④観光の本質を探る場

⑤住みたいまち、行きたいまちを作る場

【海の盆】は穏やかな松島湾の景観に、地域固有の文化が融和された情緒あふれる催事である。震災後の2011年6月に急遽【海の盆】が企画され、その年の8月にその一回目の開催を遂げた。

松島に生まれ育ち、他にはない松島の魅力を知る千葉伸一氏を実行委員長とし、彼の感性に共感した若手の有志が集い実行委員会を組織した。また、松島町役場をはじめとする行政機関や、松島観光協会など多くの応援を受け開催され、震災後の松島に鎮魂の光、希望の光を灯した。

動員数はかつての花火大会には遠く及ばないものの、大施餓鬼会や灯籠流しなど、日本の盆の原風景、そして住民を中心に寺町の夏祭りとして喜ばれ、そこに観光客が参加する。その和やかで笑顔があふれる情景が支持され、昨年に続いて2012年8月、2回目の祭りが開催された。地元の子供たちが作った灯籠を並べた「みんなの灯道」など新たな試みも大変喜ばれた。

【海の盆】を風景と人の営みをトータルに捉え、デザインによる抽出・表現・喚起・訴求し「祭り」としてグッドデザイン賞に応募し、第一次審査を通過。(2012年8月末時点)また昨年比へ、実行委員、ボランティアなどスタッフが増加。「帰属消費型」から「参加創造型」へ。人が風景の中で楽しみながら役割や意義、手応えを感じて活動すること、その舞台・場面を再現・変遷させていけること。これらはランドスケープアーキテクトにも通じる視点であると考える。

3. 松島観光事業としての意義

宮城県松島町には数多くの遺産が存在する。中央観光地のある海岸地区はもちろんであるが、海にも地にも、町内全域に文化遺産が存在する。まさに枚挙にいとまがない、その遺産全てが大事な観光資源であり、松島町の誇りでもある。遺産とは、単に祖先から残された『オタカラ』を指す静的概念ではない。

子孫へ、地域へ、放っておいたら失われて

しまう『価値ある宝』を、震災を機に見つめなおし、提示してみたら【海の盆】というカタチになった。現在享受している遺産とは、こうした動的営みを引き継いできた結果である。

現在、環境省の推奨するエコツーリズムのほか、グリーンツーリズム、ヘリテージツーリズムなど、多角的に様々な方法論で、国内観光地の再開発が始まっている。

例えばエコツーリズム。地域ぐるみで自然環境や歴史文化など、地域固有の魅力を観光客に伝えることにより、その価値や大切さが理解され、保全につながっていくことを目指していく仕組みである。

観光客に地域の資源や生活文化を伝えることによって、地域の住民も資源価値を再認識し、独創性が高まり、このような一連の取り組みによって地域社会そのものが活性化されていくものと定義されている。

結果論であるが、【海の盆】はエコツーリズムを実践したといつてよい。

国内外に誇る「日本三景・松島」の地において、先進的な観光振興策を自律的に提案し、このような施策を実現したことは、国内観光事業にとっても非常に有意義であったと考査する。

地域全体の観光事業を再構築するには、相当な時間軸でのPDCAが必要であると想定するが、まずはその目標に向かいスタートできたことが、一定の評価に値すると考える。

かつて、小さい町の厳かな盆行事である「瑞巖寺大施餓鬼会」が観光客に注目されたことがあっただろうか。700年余続く、厳粛な行事を最後まで見入っていた観光客は、松島町の夏祭りの本質を感じていたはずである。みちのくの豊かな自然と、それに育まれた地域特有の文化を寿ぎながら、観光客も松島町の盆行事に静かに合掌する。厳粛で荘厳な雰囲気でありながらも、とても和やかな光景である。

観光とは「国の光を観る。用て王に賓たるに利し」という『易経』の一節を語源にしたものである。

「自然景観」に加えて、地域の営み(生活文化)と一体となった「文化景観」さらに当

地への来訪者を魅了しながら包摂する場面。それらが調和して、優れた魅力を放つ松島町の「地域景観」が最大の「光」なのである。

4. ここに暮らす我々が誇れる町へ

やがて【海の盆】は、町民同士の結びつきを、さらに強くするお祭りになっていくであろう。楽しい光景に観光客が魅せられ、踊りの輪に加わる。町民の盆踊りを観光客が真似る。

絶景なる八百八島を目前にして町民と笑顔でふれあい、素晴らしい体験を享受できる。日本三景松島を背景に、旅情が掻き立てられる。この素敵な空気感を「光」として表現していきたい。

いい観光地の要素を簡単に定義するならば、『訪れたい町=住みたい町』と考えられる。すなわち『住みたくなる松島』として、基礎から見直すことも必要である。

『住みたくなる松島』を実現するにはまず、この町に暮らす我々がこの町の魅力を改めて理解する必要がある。地域文化、歴史、自然、生活様式などを観光客の視点に立って魅力的に伝える。

お気に入りの商店街には、毎日買い物に行きたくなる魅力がある。

住みたい町にこそ、何度も通うものである。

魅力ある町にこそ、人々が行き交うものである。

カメラには写らないその魅力がなんであるのか。

失われたままの風情が何であるのか。素敵な「光」の発想と実現の手法はそこにある。

潤沢なほどの観光資源に恵まれる松島町である。しかしながら、我々も知らない、この地ならではの魅力的な文化があるのではないだろうか。旅慣れた観光客や、町を愛する住民や観光事業従事者がすでに気付いている松島の魅力があるのではないだろうか。

【松島流灯会海の盆】の織りなす情緒の浸透が松島の洗練や発展の一助となることを切望する。



写真-4 希望の光(盆踊りの笑顔)



写真-5 日本の祭りの原風景(花火大会ではなく、背景としての花火)



写真-6 クライマックスの大施餓鬼会